

一般社団法人日本超音波医学会第 86 回学術集会を終えて

会長 増山 理

(兵庫医科大学 循環器内科 主任教授)

2013年5月24日～26日まで、大阪国際会議場（グランキューブ大阪）におきまして、日本超音波医学会第86回学術集会を開催いたしました。幸い天気にも恵まれ、4,000人をこえる工学系の先生方、医師、技師の皆様にご参加をいただきました（図1）。ご協力を賜りました先生方をはじめ、関係各位へ心より御礼申し上げます。本稿におきまして、今回の学術集会の内容をご報告させていただきます。

1. テーマについて

学術集会のテーマは「超音波を活かす」としました。超音波を「診療に活かす」、「治療に活かす」、「教育に活かす」、「(科学) 研究に活かす」ための領域横断的、そして各領域の特別プログラムを、プログラム委員の先生方を中心に立案していただきました。いずれも興味深い企画であり、その多くを採用させていただきました。ご参加いただいた方々の中には、どの会場を聴講するか迷われることもあったかと思えます。いずれの会場も熱気にあふれ、活発な討議をいただきました。一部の会場で立ち見等のご不便をおかけいたしましたこと、お詫び申し上げます。

2. 特別企画

超音波医学会は、基礎、循環器、消化器、産婦人科、泌尿器科、体表、血管、頭頸部、整形外科といった多分野の専門の先生方が一同に会することのできる学会です。この度の学術集会ではこのような学会

の特色を生かすため、特に領域横断のセッションを多く企画いたしました。その一つとして、ER編、健診・検診編と題し、各分野の指導者がここだけは見てほしいというポイントを分かりやすく解説いただきました。超音波検査の特色の一つは患者への侵襲が少なく、機敏性があり、スクリーニングに用いやすいということです。このため健康診断や人間ドック、救急の現場で多く用いられていますが、このような場では領域横断的な知識が求められます。これらの企画により、明日からの臨床に有益な情報を得ていただけたのではないかと思います。今回この企画を本学術集会の目玉の一つと位置付けましたが、いずれのセッションも立ち見がでるほどの人気があり、スタッフ一同安堵いたしました。

また、近年超音波検査の新しい領域としてその有用性が注目されている整形外科領域の特別企画も行いました（図2）。整形外科学会と一部日程が重なってしまったため、ほとんどを最終日に企画いたしました。多くの方々にご参加をいただきました。この領域における超音波検査の有用性は今後ますます高まっていくものと期待しております。

また、新たな試みとして産婦人科ライブを行いました（図3）。ボランティアの妊婦の方々にご協力をいただき、その場で実際の画像を見ながらご講演をいただきました。今回は「胎児中期スクリーニングについて」の内容でしたが、会場に入りきれないほどの盛況となりました。



図1 総合受付



図2 整形外科ハンズオン



図3 産婦人科ライブ



図4 Rebecca T. Hahn 先生



図5 Eugenio Picano 先生



図6 Jeong Seon Park 先生

3. 特別講演

特別講演としまして、海外から4名の先生方をお招きし、ご講演いただきました。

循環器は、Rebecca T. Hahn 先生 (Columbia College of Physicians and Surgeons, USA) に、無症状の重症大動脈弁狭窄症の治療をどう考えるかについて最新の知見をご講演いただきました (図4)。

また、Eugenio Picano 先生 (Institute of Clinical Physiology, Italy) には、超音波による組織性状診断についてご講演いただきました (図5)。

韓国の Jeong Seon Park 先生 (Hanyang University, Korea) からは、甲状腺エラストグラフィの臨床的有用性について、臨床に役立つ内容をお話いただきました (図6)。

James F. Greenleaf (Mayo Clinic, USA) からは、心筋の粘弾性について、基礎的な内容を含めご講演いただきました (図7)。

基礎的、そして臨床的な超音波医学の最新の知見をご講演いただき、いずれも学びの多い講演であったと思います。

4. ジョイントプログラム

第38回日本超音波検査学会学術集会とのジョイントプログラムとして、「これからの超音波検査士のあり方を考える」を開催いたしました (図8)。臨床において、超音波検査の多くは超音波技師によって行われています。この分業は今後さらに進むと考えられ、これからの超音波検査士のあり方について、医師の役割について、技師、医師の先生方それぞれにご講演いただき、活発に討議いただきました。今後もこのようなジョイントプログラムを続けることにより、患者にとって有益となる、系統だった教育・研究システムの構築ができるのではないかと考えます。また、本企画の続編として、第38回日本超音波検査学会学術集会でも同一テーマでジョイントプログラムを開催していただきました。本ジョイントプログラムでの議論を受け、具体的な提言ができるに至ったと聞いております。

5. 共催企画

多彩な分野の先生方々にご参加いただいているこ



図7 James F. Greenleaf 先生



図8 第38回日本超音波検査学会学術集会とのジョイントプログラム



図9 機器展示会場



図10-1 クイズコンテスト



図10-2 クイズコンテスト入賞者

とから、ランチョンセミナーについても、できるだけご興味のある内容に参加できるように配慮いたしました。循環器、腹部、体表、産婦人科など多岐にわたる企画にご協力いただきました各社の皆様に感謝いたします。

6. 機器展示

学術集会の魅力の一つは、最新の機器にふれられる機器展示にもあると思います(図9)。今回の学術集会におきましても機器メーカーをはじめ、多くの超音波検査に関連する企業に出展いただきました。ポスター発表の時間を他のセッションと別に設ける

ことにより、より多くの参加者に機器展示へも足を運んでいただき、華やかな会場になったと思います。また、ポスター会場と反対側に設けましたPRセッション会場におきましては各社の最新機器・機能をPRしていただくことで、出展メーカー各社にとっても有意義な機会となったのではないかと思います。

7. クイズコンテスト

教育のための企画の一つとして、○でニコリ!×でナットク!みんなの日超医クイズコンテストと題したクイズコンテストを開催いたしました。超音波の基礎から整形外科領域まで分野も広く、そして



図 11-1 会長講演

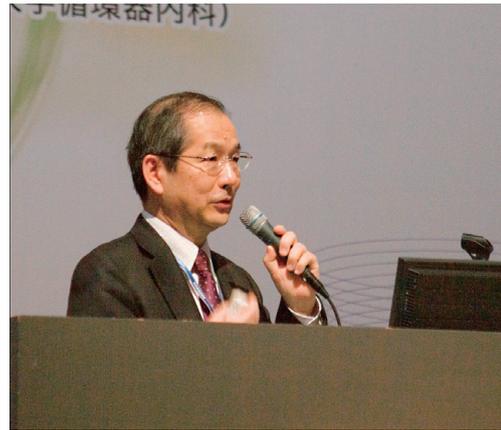


図 11-2

各分野から選りすぐりの講師の先生方に出席していただきました。3人一組でチームを組んでいただき、普段の臨床の現場とはまた違った雰囲気と同僚や多分野の者同士が協力しあって解答していただきました。予選を勝ち残った22チームにおいて最終決勝戦を行い、チーム「スーパーひとしくん（藤田保健衛生大学）」が優勝されました（図 10）。クイズコンテストの問題や解説は、いつでもまた学んでいただけるよう本にまとめました。検査士試験にも役立つ内容となっておりますので、ご興味のある方はご一読ください。

8. 会長講演

会長講演では、私が卒業後33年間かかわってきた超音波検査の過去、現在、そして未来について、これまで歩んできた道をふりかえりながら、超音波の今後の発展・期待について述べさせていただきました（図 11-1, 11-2）。30年前には超音波検査をどのように臨床応用できるかといったことが研究の

主題でありました。その後の30年間で超音波装置はめざましく進化し、確立された超音波指標をもとに、いまやどの病院でも行われています。超音波自体の研究は終わったと思った方々もおられたと思います。しかし、これからは特に「治療に活かす」、「研究に活かす」といった方向性で超音波検査がさらなる発展を遂げると考えております。

9. おわりに

この度の学術集会では、領域横断を含む多くの特別企画を行いました。無事会期を終えることができましたのは、ひとえに学会・学術集会役員の先生方をはじめ、多くの先生方のご協力を賜りましたおかげです。本学術集会の企画、運営、ご講演など、ご支援、ご協力をいただいたすべての皆様方に、スタッフ一同、心より感謝申し上げます（図 12）。また、日本超音波医学会が今後ますます発展することを祈念いたしております。



図 12 事務局スタッフ